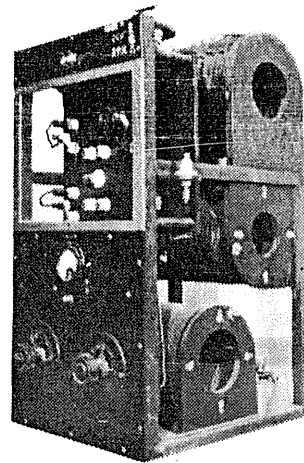
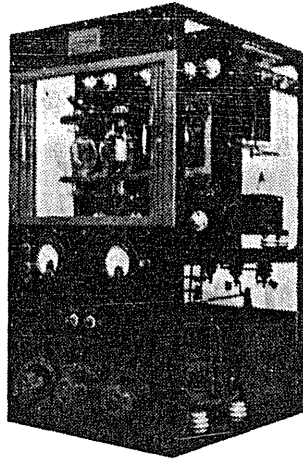


— 昔 日 の 機 器 —

200字碑

長中波200W無線電信送信機



夕映ヶ丘の中腹にありました目黒校舎の跡地は、今は2つに分けられて、丘の下側道路沿いがマンション、上半分が都立教員研究所となっていて、教育研究所の門と建物裏の傾斜した土手が僅かに昔日の面影を残しています。旧校舎の正門は、下の道路から少し登った左手にあって、門を入ったやや右手の奥まったところに一抱えもある立派な“椎の木”，その奥に木造2階建の1号館と呼ばれた校舎、そしてこの建物に並行して数条のT型アンテナを張った一対の見あげるような鉄塔が聳え立っていました。

さて、日本が電波を使って情報交換をするために実験用機器を作り始めたのは、ヘルツ波の存在が1888(明治21)年に実証されてから間もない1896(明治29)年10月で、東京月島で実地試験に成功したのが1897(明治30)年11月のことです。このころの電波の型式はB電波でした。写真は真空管式の長中波送信機ですから、次の時代のものでしょう。出力200W、使用真空管は3本(正面

向かって左からCYMOTORON KN-154, 東京電気 KN-154, TOYO UN-154), 銘板には株式会社安中電機製作所の左書きの文字, NO2345, 4.4とあり, 2個の物体から成っています。真空管を使用した送信機としては多分初期の製品でしょうから約60余年の歴史を物語る他であまり見かけない貴重な送信機といえるでしょう。私が講習所に入学したのが昭和16年4月ですから、それ以前のことは分かりませんが、既にこのときに1号館の奥まった工学実験室に置かれていました。幸い教職員と学生の努力で校舎が戦災を免れましたので、昭和21年12月技術科勤務になったときも同じような場所に置かれていました。

調布に移転して30有余年、作動することもなく、暗い物置の中でほこりに埋もれたままになっていますが、しかしその姿は多くの卒業生共々忘れられない存在であることは確かです。

(電子情報学科教授 宮坂武芳)

中川 [558]